

竹取物語

# 竹取物語

竹取物語 上卷

今は昔、竹取の翁おきなと云へる者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬づの事につかひけり。名をばさるみやつこき造となん云ひける。其の竹の中に、本光る竹なん一筋ありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒つゝの中なか光りたり。其れを見れば、三寸許ばかりなる人、いと美しくして居たり。翁云ふやう、

「我れ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子に成り給ふべき人なめり」とて、手に打ち入れて家へ持ちて來ぬ。妻めの女にあづけて養はす。美しくしきこと限なし。いと幼ければ籠こに入れて養ふ。竹取の翁竹とるにこの子を見つけて後に、竹を取るに、節ふしを隔て、節毎よごとに金こがねある竹を見つくる事かさな豊りぬ。かくて翁やうやう秋田ゆたかに成り行く。此の兒ちこ養ふ程にすく／＼と大おほきに成りまさる。三月みつきばかりなる程に、よき程成る人に成りぬれば、髪かみ上あげなどそうして、髪かみ上あげさせ、裳かみ著す。几帳とばりの内より

も出さず、いつきかしづき養ふ程に、此の兒ちこのかたちけそうなる事世になく、家やの内は暗き所なく光満ひかりちたり。翁心地あしく苦しき時も、此の子を見れば苦しき事も止やみぬ。腹立しき事も慰みけり。翁竹を取る事久しくなり榮えにけり。此の子いと大きに成りぬれば、名をば三室みむろ戸齋部といんべのあきた男を呼びて付けさす。秋田なよ竹のかぐや姫と付け侍る。此の程三日、打ちあげ遊ぶ。萬づの遊をぞしける。男はうけきらはずよび集へて、いとかしこく遊ぶ。世界の覗おのこ、貴あてなるも賤いやしきも、いかで此のかぐや姫を得て

しがな、見てしがなと音おとに聞きめで惑まどふ。其の傍あたりの垣かきにも家やのとも、居をる人だに容易たはやすく見るまじきものを、夜は安やすきいも寝ず、闇の夜にも此こ所と彼所かしこより垣のぞき君達かま間見まみ惑まどひあへり。さる時よりなんよばひとは云ひける。人の物ともせぬ所に惑まどひ歩ありけども、何なにの効しるしあるべくも見えず。家の人共どもに物をだに云はんとて、云ひ懸かくれども、ことゝもせず。邊あたりを離はなれぬ益きん、夜を明し日を暮す人多かりける。おろかなる人は石上やうなき歩ありはよしなかりけりとて來こずなりにけり。其の中に猶云ひけるは、色好いろこのみと云はるゝ

人五人、思ひ止む時なく夜晝來りけり。其の一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿部三連、大納言一人は<sup>おおとものみゆき</sup>大伴御行、中納言一人は<sup>いそのかみ</sup>遣もろたか此の人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人達なりければ、かぐや姫を見まほうして、物も食わず思ひつゝ、彼の家に行きて、たゞすみあるきけれども、かひあるべくもあらず、文を書きて頼れども、返事もせず、侘歌など書きて遣すれども、かひなしと思へども霜月極月の降り氷り、六月の

照りはたゞくにも障らず來たり。此の人々、或る時は竹取を呼び出だして、「娘を我れに賜べ」と伏し拜み、手を摩りの給へば、「己が、なさぬ子なら、心にも從へず」となん云ひて月日を送る。かかれれば此の人々家に歸りて物を思ひ、祈禱をし願を立て、思ひ止むべくもあらず。さりとも遂に男合せざらんやはと、思ひて強をかけたり。在ちに志を見えありく。是れを見つけて、翁かぐや姫に云ふやう、「御身は佛、變化の人と申しながら、是れ程大さままで養ひ奉る志を疎かならず、翁の申さん事、

聞き給ひてんや」と云へば、かぐや姫、「何事をか宣はん事は承らざらん。變化の者にて侍りけん身とも知らず。親とこそ思ひ奉れ」と云ふ。翁、「嬉しくも宜ふものかな」と云ふ。「翁年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず、此の世の人は、男は女に逢ふことをす、女は男にあふことをす。其の後なん門かど廣くもなり侍る。いかでさる事なくては御坐おはせん」。かぐや姫の云はく、「なんでふさる事かし侍らん」と云へば、「變化へんげの人と云ふとも、女の身もち給へり、翁のあらん限かぎりはかうでも在いませ

かし。此の人々の年月を經へて、かうのみ容貌いさましつゝ宜ふ事を、思ひさだめて一人々々に逢ひ給へや」と云へば、かぐや姫云はく、「よくもあらぬ明日かたちを、深き心も知らであだ心つきなば、後悔のちくやしき事も有るべきをと思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き志を知らでは、逢ひ難しとなん思ふ」と云ふ。翁云はく、「思ひの如くも宜ふかな。抑いかやうなる志有らん人にか逢はんと思す。かばかり志疎おろかならぬ人々にこそあめれ」。かぐや姫の云はく、「かばかりの深きをか見んと云はん、いさゝ

かの事なり。人の志ひとしかんなり。  
いかでか中に劣勝は知らん。五人の  
中にゆかしき者を見せ給へらんおとりまさりに、  
御志勝りたりとて、仕うまつらんと、  
其のおはすらん人々に申し給へ」と  
云ふ。「よき事なり」と承うけつ。日  
暮るゝ程、例の集りぬ。人々或は笛  
を吹き、或は歌をうたひ、或は唱歌しやうか  
をし、或はうそを吹き、扇を鳴らし  
などするに、翁出て云はく、「忝く  
もきたなげなる所に、年月を經ても  
のし給ふ事、ありがたく畏かしこまると申  
す。翁の命いのち、今日君達とも知らぬを、  
かく宣きんふ蓬萊さんだいにも、よく思ひ定めて

つかうまつれ」と申も理ことわりなり。「い  
づれの劣勝おはしまさねば、御志の  
ほどは見ゆべし。仕うまつらん事は、  
其れになん定むべき」と云へば、  
「是れ善き事なり。人の恨うらみもあるま  
じ」と云ふ。五人の人々も、「善き  
ことなり」と云へば、翁入りて云ふ。  
かぐや姫、「石作皇子いしづくりのみこには、佛の御  
石の鉢はちと云ふ物あり、其れを取りて  
賜へと云ふ。車持皇子くらもちのみこには、東の海  
に白銀はくぎんと云ふ山あるなり。それに  
石上しらがねを根とし、黄金こがねを莖くきとし、白き  
玉を實みとしてたてる木あり。其れ一  
枝折りて賜はらんと云ふ。今一人に

は、唐土もろこしにある火鼠ひねずみの皮ぎぬを賜へ。  
 おおともおおもものの  
 大伴大納言には、龍たつの首に五色に光  
 る玉あり。其れを取りて賜へ。石上いそのかみの  
 中納言には、燕つばめの持たる子安貝こやすがひ取り  
 て賜へ」と云ふ。翁、「難き事にこ  
 そあなれ。此の國にある物にもあら  
 ず。かく難き事をばいかに申さん」  
 と云ふ。かぐや姫、「何か難からん」  
 と云へば、翁、「ともあれかくもあ  
 れ申さん」とて出で、「かくなん、  
 聞ゆるやうに見給へ」と云へば、  
 皇子みこだち、上達部かんだちべ聞きて、「おいら  
 かに邊寄あたりよりだに心地ありきそ、とやは宣  
 はぬ」と云ひて、うんじて皆歸りぬ。

猶此の女見では、世にあるまじき持こころ  
 のしければ、天竺てんぢくにある物も持もて來  
 ぬものかはと、思ひめぐらして、石  
 作皇子のみこは、心のしたく有る人にて、  
 天竺てんぢくに二つと無き鉢はちを、百千萬里の  
 程行いきたりとも、いかでか取るべき  
 と思ひて、かぐや姫の許には、今日  
 なん天竺てんぢくへ石の鉢はちとりはちにまかると聞  
 かせて、三年ばかり、大和國やまとのくに十市群とほちのこほり  
 に、ある山寺に資頭びんづる蘆あしの前なる鉢はちの、  
 ひた黒にすみつきたるを取りて、錦  
 の袋に入れて、作花つくりばなの枝につけて、  
 かぐや姫の家に怪もて來て見せければ、  
 かぐや姫文あやしがりて見れば、鉢はちの中

に詠ふみあり。ひろげて見れば、

海山うみやまのみちに心をつくしはてな

いしの鉢ひかりのなみだながれけ

かぐや姫ひかり光やあると見れば、螢ひかりばかりの光だに無し。

置く露の光をだにもやどさまし

小倉山おぐらにて何もとめけん

とて返し出いだす。鉢を門に棄て、此の歌の返しをす。

しら山にあへば光のうするかと  
はちを棄て、もたのまる、かな

と詠よみて入れたり。かぐや姫返しも  
せずなりぬ。耳にも聞き入れざりけ  
れば、云ひか、づらひて歸りぬ。か

れ鉢を棄て、また云ひけるよりぞ、  
面おもなき事をば、はちをすつとは云ひ  
ける。

車持皇子くらもちのみこは、心たばかり有る人にて、

公おほやけには、筑紫國つくしのに湯あみに罷らんと

て、暇申して、かぐや姫の家には、

「玉の枝取りになんまかる」と云は

せて下くだり給ふに、仕うまつるべき

人々、皆難波なにはまで御送みおくりしける。

皇子みこいと忍びてと宣はせて、人も數

多率おほいておはしまさず、近うつかう

まつる限して率て給ひ、御送の人々、

見奉り送りて歸りぬ。おはしましぬ

と人には見え給ひて、三日ばかりあ

りて漕ぎ歸り給ひぬ。豫て事皆おほせたりすれば、其の時一つのたからなりける内匠大人を召し取りて、容易たはやすく人寄り來くまじき家を作りて、かまとを三重みへに爲し籠こめて、工匠等たくみらを入れ給ひつゝ、皇子みこも同じ所に籠り給ひて、しらせ給ひたるかぎり、十六そを、かみにくどをあけて、玉の枝を作り給ふ。かぐや姫宣ふやうに、違はず作り出でつ。いとかしこくたばかりで、難波に竊に持て出でぬ。船に乗りて歸り來にけりと、殿に告げ遣りて、いといたく苦しがりたるさまにして居給へり。迎に人多く参

りたり。玉の枝をば長櫃ながびつに入れて、物覆ひて持ちてまゐる。いつか聞きけん。車持皇子くらもちのみこは、優曇華うどんぐゑの花持ちて上り給へりとのゝしりけり。其れをかぐや姫聞きて、我れは此の皇子みこに負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。かゝる程に門を叩たきて、車持皇子くらもちのみこおはしたりと告ぐ。旅の御姿ながらおはしたりと云えば、逢ひ奉る。皇子宣はく、「命を捨て、彼の玉の枝持ちて来る」とて、「かぐや姫に見せ奉り給へ」と云へば、翁持ちて入りたり。此の玉の枝に文ぞ附けたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の  
枝を手折らでさらに歸らざらまし

其れをもあはれとも見で居るに、竹  
取の翁走り入りて云わく、「此の  
皇子に申し給ひし蓬萊の玉の枝を、  
一つの所を一つの所怪しき所なく、  
あやまたず持ておはしませり。何を  
もてかとかく申すべき。旅の御姿な  
がら、我が御家へも寄り給はずして、  
おはしましたり。はや此の皇子に逢  
ひ仕うまつり給へ」と云ふに、物も  
云はず頬杖をつきて、いみじう歎か  
しげに思ひたり。この皇子今更何か  
と云ふべからずと云うまゝに縁に這

いのぼり給ひぬ。翁理に思ふ。此の  
國に見えぬ玉の枝なり。此の度はい  
かでかいなび申さん。人さまも好き  
人におはすなど云ひ居たり。此の度  
はいかでかいなび申さん。人さまも  
好き人におはすなど云ひ居たり。か  
ぐや姫の云ふやう、「親の宜しふ事  
をひたぶるにいなび申さん事のいと  
をしさに、取り難き物を、かくあさ  
ましく持て来る事をねたく思ひ」翁  
は聞の内しつらひなどす。翁、皇子  
に申すやう、「いかなる所にか此の  
木は候ひけん、あやしく麗はしくめ  
でたき物にも」と申す。皇子答へて

宣はく、前さき一おと昨年としの二月きさらぎの十日ごころ頃ころに、難波なにわより船ふねに乗りて、海中うみに出いで、行かん方かたも知らず覺えしかど、思ふ事成らでは、世の中に生きて。何かせんと思ひしかば、たゞ空むなしき風に任せてありて、命死なばいかゞはせん、生きてあらん限かくありきて、蓬萊ほうらいと云ふらん山やまに逢あふやと海うみに漕こぎたゞよひありきて、我が國の内を離はなれてありき籠かごりしに、或る時は浪なみ荒れつゝ、海うみの底そこにも入りぬべく、或る時には風につけて、知らぬ國に吹き寄せられて、鬼おにのやうなる物出で来て、殺さんとしき。或る時には

來こし方かた行く末も知らで、海にまぎれんとし、或る時にはかて盡きて草の根を食物くひとし、或る時はいはん方なき、むくつけぐなる物の來て、食くひかからんとしき。或る時は海の貝を取りて、命を續つぐ。旅の空に助け給ふべき人も無き所に、いろ／＼の病をして、行方ゆくへ空も覺えず。船の行くに任まかせて、海うみに漂たぐよひて五百日いほかと云ふ辰たつの刻ばかりに、海の中にはつかに山見ゆ。船のうちをなんせめて見る。海の上に漂たぐよへる山、いと大きにてあり。其の山のさま高く麗はし。是れや我が見もむる山ならんと思ひて、さ

すがにおそろしく覚えて、山のめぐりを指し廻めぐらして、二三日ばかり見ありくに、天人の粧よそひしたる女、山の中より出で来て、銀しろかねの金碗かなまるを持って、水を汲みありく。是れを見て、船よりおりて、「此の山の名を何とか申す」と問ふに、女答へて云う、「是れは蓬萊ほうらいの山なり」と答ふ。是れを聞くに、嬉うれしき事限なし。此の女、「かく宣ふは誰たぞ」と問ふ。「我が名はほうかんりるり」と云いて、ふと山の中に入りぬ。其の山を見るに、更に登るべきやう無し。其の山のそばひらを廻れば、世の中に無き花の

木どもたてり。金銀こがねしろがね 瑠璃色るりいろの水山より流れ出でたる、それにはいろ／＼の玉の橋渡はしせり。其のあたりに照てり輝かがやく木ども立てり。其の中に此の取りて持もて参うで来たりしは、いと悪わるかりしかども、宜よろひしに違はましかばと、此の花を折おりて参うで来たるなり。山は限なく面白し。世に譬たとふべきにあらざりしかど、此の枝を折りてしかば更に心もとなくて、船に乗りて、追風吹おひかせきて、四百餘日になん参うで来にし。大願の力にや、難波より昨日なん都に参うで来つる。更に潮しほに濕ぬれたる衣だぶ脱かぎ替へな

でなん、たち参うで來つる」と宣へば、翁聞きて打ち歎きて詠める。

呉竹くれたけのよゝの竹取野山にもさ

やは侘びしきのふしをのみ見し

是れを皇子みこ聞きて、「こゝらの日比、

思ひ侘び侍りつる心は、今日なん

落入おちゐぬる」と宣ひて返し、

わが袂今日かわければ侘びし

さの千草ちぐさのかずも忘れぬべし